

平成21年5月15日現在

研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19320142
 研究課題名（和文） 産業と文化の経営人類学的研究
 研究課題名（英文） An Anthropological Research on the Administration of Industry and Culture
 研究代表者
 中牧 弘允（NAKAMAKI HIROCHIKA）
 国立民族学博物館・民族文化研究部・教授
 研究者番号：90113430

研究成果の概要：産業と文化の相関関係を実証的に究明し、その論理の抽出をめざし、①環黄海経済圏の産業と都市における文化創造・文化交流、②世界遺産をめぐる日中ならびにスペインの産業振興と文化交流、③文化活動を機軸とする産業と都市の協働関係の3つの領域に分けて調査をおこなった。近年の創造都市論や創造階級などの議論に見られるような文化を重視する視点から、都市の活性化、文化産業の興隆、世界遺産の積極的活用、地域祭礼の振興などに関する貴重な知見が得られた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	7,900,000	2,370,000	10,270,000
2008年度	7,100,000	2,130,000	9,230,000
年度			
年度			
年度			
総計	15,000,000	4,500,000	19,500,000

研究分野：宗教人類学・経営人類学

科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学・民俗学

キーワード：産業、マネジメント、文化創造、文化交流、世界遺産、協働関係、メセ、クリエイティブクラス

1. 研究開始当初の背景

長い間、産業は経済と政治の問題と考えられてきたが、近年は創造都市論や創造階級、あるいは観光や文化産業の議論とあいまって、文化が産業振興の有力な要因として浮上してきた。本研究は創造都市研究と世界遺産・都市祭礼をめぐる産業振興に焦点を当てて産業と文化の相関関係を実証的に把握し

ようとした。

2. 研究の目的

産業と文化の相乗効果は近年ますます意識的に追求されるようになってきている。行政が主導する場合もあれば、産業界が牽引する場合もあり、また文化団体が率先して働きかける場合もある。いずれにしろ、ばらばらな動

きを統合する機能（政治・経営）がその成否の鍵を握っているといっても過言ではない。本研究ではマネジメント（経営）に焦点を当てながら、産業と文化の相関関係を実証的に究明し、その論理を抽出し、理論に高めることをめざした。

3. 研究の方法

領域を三つに分けたのは、これまでの研究蓄積とテーマ性に配慮したためであり、結果的にスムーズな調査につながった。領域①では環黄海経済圏を標榜する 10 都市連携に注目して、北九州市と下関市、ならびに大連市を中心に共同で、あるいは個別にテーマを追究しようとした。また、人々の移動に着目して文化の交流とその意味を明らかにすることをめざした。領域②では日中の宗教的世界遺産を共通テーマとし、カトリック聖地の世界遺産と比較することで、それぞれの特徴を抽出しようとした。領域③ではねぶたと阿波踊りを中心に経済学的、経営学的観点から祭礼を分析し、企業と行政の関係について新たな知見を加えようとした。

4. 研究成果

【2007 年度】

(1) 領域①『環黄海経済圏の産業と都市における文化創造・文化交流』

北九州市で新日鉄等の企業と北九州市との協働関係、港湾事業、イノベーションギャラリー、正月の民俗行事などについて調査し、下関では港湾事業、朝鮮通信使の行列再現、大連神社などの調査を実施した。大連においては日系企業のメセナ活動、日本人駐在員の文化・スポーツ活動、企業家の建立した仏教寺院、春節などについて調査した。中国では連雲港で日系企業や中国企業の文化活動について、青島ではコリアンの企業活動につい

て調査した。韓国では釜山の港湾事業、仁川の中華街整備などについて調査をおこなった。

(2) 領域②『世界遺産をめぐる日中ならびにスペインの産業振興と文化交流』

熊野において世界遺産登録の経緯について文書資料を収集するとともに関係者への聞き取り調査を実施した。世界遺産が社寺や企業のみならず、ユネスコ—日本政府—都道府県—市町村という系列の行政が新規文化マーケットの拡大に貢献していることが判明した。中国では北京、ならびに山東省の泰山、曲阜（孔廟、孔府、孔林）で世界遺産の調査をおこない、北京オリンピックに向けて文化政策がいかに関心されているかの一端を調べることができた。

(3) 領域③『文化活動を機軸とする産業と都市の協働関係』

徳島の阿波踊りとその波及状況、ならびに青森のねぶたについて経営学的視点からのデータ収集ができた。また企業と行政が祭りの推進母体として緊密な連携をとりながら、観光客の誘致につとめていることが経済学的統計データからも分析できた。

【2008 年度】

(4) 領域①『環黄海経済圏の産業と都市における文化創造・文化交流』

北九州市の製鉄所、イノベーションギャラリー、環境ミュージアムなどを訪問し、下関市では馬関祭りにあわせて朝鮮通信使の行列再現行事をはじめ環黄海の文化交流をつなぐものに焦点を当てた。大連ではスポーツ交流の実態を調べた。

(5) 領域②『世界遺産をめぐる日中ならびにスペインの産業振興と文化交流』

吉野の補足調査をおこなうとともに、「紀伊山地の霊場と巡礼道」と共通点の多いサンチアゴ・デ・コンポステラ巡礼の調査をおこ

なった。また、泰山の登山節にあわせて調査を実施するとともに、曲阜では孔子関連の施設や事業にくわえ孟子の故里や孟廟の調査をおこなった。

(6) 領域③『文化活動を機軸とする産業と都市の協働関係』

青森のねぶたと徳島の阿波踊りの調査を継続し、かつ仁川市では市の行政主導の中東研究院、韓国移民博物館、ならびにチャイナタウンの調査をおこなった。

(7)2008年5月9～10日、北京中央民族院で開催された「東アジア人類学における相互理解のワークショップ」で領域①の研究成果を報告した。また、2008年9月22日、イタリアのレッツェでひらかれたヨーロッパ日本研究協会(EAJS)の大会で「Festival and World Heritage: Management of Region and Religion in Japan」というパネルを組織し、領域②と領域③に関する報告をおこなった。

(8)2年間の研究成果をまとめ、報告書『産業と文化の経営人類学的研究』(222頁)を印刷した。

領域①では環黄海経済圏の文化交流、地域交流、人的交流に加え、経済的競争力についても議論を提起したので、東アジア経済交流推進機構にとっても参考資料となることが期待される。領域②では政府や行政が世界遺産登録の推進母体となっていて、宗教は副次的な役割しか果たしていないことが解明された。また、都市連携が世界遺産をめぐる強化されつつあることも明らかにできた。領域③については、観光と祭礼の結びつきを統計的に処理することで、地域や都市にとって持つ経済的・経営的な意義をある程度見通すことができた。

文化イベントや宗教活動に企業や行政が

いかにかかわるかというテーマは21世紀の産業と文化を語る上で不可欠な視点であることを再確認した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計19件)

1. 中牧弘允 「情報としての遺産と資源-世界遺産と文化資源の比較文化考察」『国際理解教育』15号 123-137頁 2009 査読有
2. 中牧弘允 「環黄海における産業と文化の交流-「つなぎとめるもの」をとおして-」『産業と文化の経営人類学的研究』国立民族学博物館 2009 5-15頁 査読無
3. 澤木聖子 「「朝鮮通信使」の行列再現行事にみる環黄海の地域間交流-下関・馬関まつりを中心に-」『産業と文化の経営人類学的研究』国立民族学博物館 2009 17-23頁 査読無
4. 曹斗燮 「環黄海経済圏における港湾都市の競争力に関する研究」『産業と文化の経営人類学的研究』国立民族学博物館 2009 25-43頁 査読無
5. 陳天璽 「チャイナタウンを通してみる環黄海経済圏の産業と文化」『産業と文化の経営人類学的研究』国立民族学博物館 2009 45-54頁 査読無
6. 具知瑛 「中国青島のコリアンタウン-移動するモノや人を結ぶ空間-」『産業と文化の経営人類学的研究』国立民族学博物館 2009 55-65頁 査読無
7. 澤野雅彦 「姉妹都市と東アジアのスポーツ交流-大連の野球を中心として-」『産業と文化の経営人類学的研究』国立民族学博物館 2009 67-85頁 査読無

8. 晨 晃 「大連の日本人社会—ソーシャル・キャピタル投資活動と現地社会への影響—」『産業と文化の経営人類学的研究』国立民族学博物館 2009 87-105 頁 査読無
9. 金子 毅 「色彩なき環境からの文化創造—北九州における公害闘争と城山小学校のメッセージ—」『産業と文化の経営人類学的研究』国立民族学博物館 2009 107-135 頁 査読無
10. 中牧弘允 「世界遺産としての熊野とサンティアゴ・デ・コンポステーラ—地域と宗教のイノベーション—」『産業と文化の経営人類学的研究』国立民族学博物館 2009 137-146 頁 査読無
11. 住原則也 「奈良吉野と世界遺産—「世界遺産化」現象の一事例として—」『産業と文化の経営人類学的研究』国立民族学博物館 2009 147-152 頁 査読無
12. 中牧弘允 「中国における儒教復興の諸相—北京と曲阜を中心に—」『産業と文化の経営人類学的研究』国立民族学博物館 2009 153-165 査読無
13. 住原則也 「泰山調査の報告」『産業と文化の経営人類学的研究』国立民族学博物館 2009 167-171 頁 査読無
14. 三井 泉 「都市経営の「ビジネスモデル」としての祭り—青森・五所川原・弘前の「ねぶた」調査を中心として—」『産業と文化の経営人類学的研究』国立民族学博物館 2009 173-183 頁 査読無
15. 竹内恵行 「祭りの経済効果—競争と協調—」『産業と文化の経営人類学的研究』国立民族学博物館 2009 185-193 査読無
16. 出口竜也 「企業と祭り—阿波おどりと高知よさこい祭りを事例に—」『産業と文化の経営人類学的研究』国立民族学博

物館 2009 195-212 頁 査読無

17. 岩井 洋 「異文化理解の経営人類学—韓国・仁川市の事例—」『産業と文化の経営人類学的研究』国立民族学博物館 2009 213-222 頁 査読無
18. 中牧弘允 「世界遺産としての熊野—地域と宗教のイノベーション—」『国際宗教研究所ニュースレター』59 号 40-43 頁 2008 査読無
19. 中牧弘允 「中国における儒教復興の動向」『宗教と現代がわかる本2008』97-99 頁 平凡社 2008 査読無

[学会発表] (計1件)

1. Festival and World Heritage: Management of Region and Religion in Japan, EAJS (European Association for Japanese Studies) 2008年9月22日 イタリア、レッツェ市サレント大学 発表者: 中牧弘允、住原則也、竹内恵行、出口竜也、三井泉(誌上)

[図書] (計1件)

1. 中牧弘允編 『産業と文化の経営人類学的研究』国立民族学博物館 2009 222 頁

[その他]

国立民族学博物館ホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/research/sr/19320142.html>

新聞掲載情報

1. 中牧弘允 「続カミ・ホトケはどこへ① 曲阜」『読売新聞』(大阪版)(夕刊)2008年3月25日掲載
2. 中牧弘允 「続カミ・ホトケはどこへ② 熊野」『読売新聞』(大阪版)(夕刊)2008

年4月1日掲載

3. 中牧弘允「続カミ・ホトケはどこへ③
北九州」『読売新聞』（大阪版）（夕刊）
2008年4月8日掲載
4. 中牧弘允「続カミ・ホトケはどこへ④
大連」『読売新聞』（大阪版）（夕刊）2008
年4月15日掲載

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中牧 弘允 (NAKAMAKI HIROCHIKA)
国立民族学博物館・民族文化研究部・教授
研究者番号：90113430

(2) 研究分担者

陳 天璽 (CHIN TENJI)
国立民族学博物館・民族社会研究部・准教授
研究者番号：40370142

(3) 連携研究者

岩井 洋 (IWAI HIROSHI)
関西国際大学・人間科学部・教授
研究者番号：30269956

澤木 聖子 (SAWAKI SHOKO)
滋賀大学・経済学部・教授
研究者番号：40301824

澤野 雅彦 (SAWANO MASAHIKO)
北海学園大学・経営学部・教授
研究者番号：00126492

住原 則也 (SUMIHARA NORIYA)
天理大学・国際文化学部・教授
研究者番号：50248184

竹内 恵行 (TAKEUCHI YOSHIYUKI)
大阪大学・大学院経済学研究科・准教授
研究者番号：60216869

曹 斗燮 (CHO DU-SOP)
横浜国立大学・大学院国際社会科学研究所
教授
研究者番号：20262834

出口 竜也 (DEGUCHI TATSUYA)
和歌山大学・観光学部・教授
研究者番号：60237021

晨 晃 (HAYASHI AKIRA)
神田外語大学・異文化コミュニケーション研究所・
准教授
研究者番号：20275978

日置 弘一郎 (HIOKI KOICHIRO)
京都大学・経営管理専門職大学院・教授
研究者番号：70114022

廣山 謙介 (HIROYAMA KENSUKE)
甲南大学・経営学部・教授
研究者番号：70156727

三井 泉 (MITSUI IZUMI)
日本大学・経済学部・教授
研究者番号：00190679